

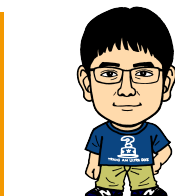
T.A ULTRAQUIZ

CROSS REVIEW

第1回～第6回
クロスレビュー

2015.11 執筆 2020.10 一部加筆

ねおかず



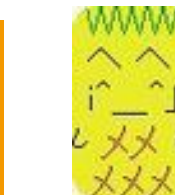
ウルトラファンサイト管理人
ウルトラの美術セット好き

コアタイム



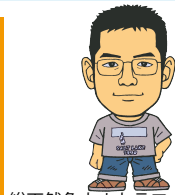
テレビマンユニオンのウルトラ
クイズをこよなく愛す、ウルトラ
らしまんちゅ

いけがわ



マンガ研究家。ウルトラクイズ
はストーリー性やバックボーン
を重視した視聴スタイル

なりすけ



総天然色ウルトラファンであり
Vtuberであり、ゲーム実況者
挑戦者のエピソードが好き

史上最大！
アメリカ横断ウルトラクイズ



1977年
10月20日/
27日放送

参加者
404人

優勝賞品

ラスベガスの土地1エーカー

視聴率

約 23%

史上最大！第2回
アメリカ横断ウルトラクイズ



1978年
11月9日/
16日/23日
放送

参加者
700人

優勝賞品

豪華ホテルに家族で宿泊

視聴率

23.9%

史上最大！第3回
アメリカ横断ウルトラクイズ



1979年
11月8日/
15日/22日
放送

参加者
1362人

優勝賞品

直線しか走れない競走馬

視聴率

23.9%

史上最大！第4回
アメリカ横断ウルトラクイズ



1980年
10月30日/
11月6日/13日
放送

参加者
2707人

優勝賞品

手作りライトブレン

視聴率

29.9%

史上最大！第5回
アメリカ横断ウルトラクイズ



1981年
10月8日/15日/
22日/11月5日
放送

参加者
6473人

優勝賞品

油田探掘権

視聴率

27.2%

史上最大！第6回
アメリカ横断ウルトラクイズ



1982年
10月7日/14日/
21日/28日放送

参加者
7332人

優勝賞品

超短期間世界一周の旅

視聴率

27.2%

番組作りには手探り感が見えるし、クイズ形式は○×・3択・早押しクイズのみ。しかし「タダで海外旅行に行ける!」という触れ込みはインパクト大。さらにスタジオルート紹介、敗者予想、ジャンケン、ゲストクイズ、罰ゲーム等、ウルトラの要素が最初からあったことにも驚き。

○×、ジャンケン、機内パーパー、コンピューター予想に罰ゲーム。さらにはスタジオ（高島、石川コンビ）やルート紹介など、その後定番となる要素が初回から行われていることに驚いた。まさにウルトラの原点が詰まった回ともいえる。ぜひともファミ劇で再放送を!

「新しい鉱脈を見つけた」佐藤プロデューサーがアメリカから2週放送への変更を依頼した言葉だ。ヤマ師のテレビ屋が集まり、いろんな奇跡が重なって実現したムチャな番組。第1回の基本コンセプトの完成度がすばらしく、その後の成功はこの時点で約束されたといえるだろう。

一時間半の放送を全二回と規模は小さいが最初の放送の時点でジャンケン、早押し機、罰ゲーム、週末たぎ、優勝賞品のオチといった基本フォーマットが既に確立されていた。参加者は404人と最少。しかし挑戦者全員がこれより前にはまだ存在していなかったウルトラクイズの誕生に立ち会うという素晴らしい「正解」を選んだと言える。

第1回が大好評だったためか、強気の構成で、全体的に意地悪な印象は賛否ありそう。しかし、「史上最大!」の名に恥じないクイズ形式は第1回以上。プーバゲートが新登場したりと見るべきところも多い。ちなみに早押しテーパーが青と白の2種類あるのはこの大会だけなのだ。

定番 BGM が使われず違和感を感じる(笑)。ゲストクイズで毒グモを食べる男や、デンバーの厳しい寒さでTシャツ1枚の女性は今なら放送できないかも。パンナムビルの屋上ではしゃぐ北川さんと留さんが相撲をとり、仰向けのまま勝者インタビューを行う所は非常に好きなシーン。

やや珍しい北部周りのルートで、リレークイズやギャンブルクイズなどクイズ形式にウルトラらしい要素が加わった第2回。ただ3週放送のノウハウがまだ不慣れで、編集のメリハリに乏しいのがちょっと残念。今見ると北川さんけっこうイケメンだなあ。

前回批判を受けたであろうジャンケン予選が継続された。強者をふるいにかける機能は勿論のこと、クイズという概念が無い年少の視聴者でもジャンケンならルールが分かる為視聴者年齢層の下限を大幅に広げた効果は大きい。同じく批判を受けたと思われる優勝賞品は今回かなりまともな物になったが次からは元に戻っていて安心した。

テーマ曲「スタートレック」が使用され、従来のクイズも洗練し、ウルトラクイズのフォーマットが完成された意味ある大会。クイズ形式も多様化され、パラマキクイズの新登場により体力系クイズの比重が増した。挑戦者へのあだ名もこの頃から定着。トメさんのパンチパーマも必見。

お待ちどうさま!のBGM初登場!ルート紹介で各CPの絵が登場するなどフォーマットが固まってきた回ですね。ツッソンのパラマキで敗れたボタンキューの妙子ちゃんと、千春ちゃんの健闘ぶりが光る。ワシントンの罰ゲームでWハウス前の公園をゴミで汚すのは今なら国際問題に?

「知力体力時の運」を象徴するパラマキクイズという「発明」が生まれた第3回。このころから事前ロケハンも緻密になり立体的なウルトラクイズの「絵」が完成されていく。またオープニング・ルート紹介・ペーパークイズの曲が定番化したのも大きい。ただし内容の印象はやや薄い感じ。

参加者は1000人を突破。前回の第一次予選○×走りで片方に集まる挑戦者の偏りが著しかったのを受けて○×ボールを持って走る方式が導入された。このワンクッションだけで以降全大会の○×走りが纏まった進行になったのは神技と言わざるを得ない。早い者勝ちで自分で問題を持って来るパラマキクイズが誕生した回という点も重要。

準決勝4名全て女性という唯一の大会。唯一の女性クイズ王も誕生。成田のジャンケンで敗者復活戦が行われ、敗者救済の演出も増えた。屋内でのクイズも多く、クイズ形式がさらに柔軟になった印象。罰ゲームの「インディアンのかい」と称したかいの儀式は今じゃクレーム必至?

大会自体はハチマキ娘の上田さんが頭一つ抜けていた。成田で「あのハチマキ欲しい!」と対戦相手から貰って、そのまま優勝しちゃうんだから凄いな。フェルトリコでは佐藤Pの著書通り女性陣の華やが感アップ!女性優位の大会に相応しい準決勝。男性陣 orz

「あのハチマキほしい」から始まったシンデレラストーリー。優勝者決定からの逆算で編集されたドラマづくりもあって、番組構成バランスもよい回。ドロコ・通過クイズという「要所」のクイズ形式が決まったのも構成的重要なポイントだ。サイパン途中下車ってどうやったんだろう?

レギュラー大会初そして唯一の女性優勝者を輩出した回。ウルトラクイズの戦いを終えた人達が次回も参加してクイズ王を目指すというV2を狙ったりするとかいう「夢を見続ける」権利を持っているとすれば、次の大会以降殆ど姿を現さなかった今大会の優勝者は日常に戻る為に「夢を見終わる」権利を行使したのかも知れない。

参加者が爆発的に増え、球場入り口で第1問が出題されるようになった。メキシコに行ったのもこの大会が初めて。そして今後のウルトラクイズの名物「通せんぼクイズ」が発明された重要な大会。初期ウルトラの完成形。「メガネカキリ」という優勝者のあだ名は強烈に忘れられない。

定番「早く来い来い木曜日」フリーズ初登場!初の4週放送で本土上陸人数の増加、メキシコ初上陸など記念大会的扱いでノリに乗る。プラザメヒコ闘牛の罰ゲームは留さん一押し。ノックスビル通せんぼクイズは大熱戦!結婚式の演出と共に敗者二人のインタビューが胸を打つ名作

スケールアップしたルート、ユニークな挑戦者たち、緊張感のあるクイズ戦、過激な罰ゲーム、敗者コメントを引き出すトメさんの充実ぶり、夢のある賞品、とエンターテインメント性がつまった名作回。個人的には嬉々として「クレール宙吊りドボンクイズ」を紹介する石川アナがツボ。

第4回の準決勝方式が進化した通せんぼクイズが初登場し、その後の準決勝の定番スタイルに。優勝者が各チェックポイントでギリギリ争いをしているかのような戦いを演じていたお陰でテレビにはずっと映り続ける事となり、結果として視聴者が一番名前と顔を覚えやすい人を最後まで観続けられたという良いハマり方をした回だった。

「福留 VS 挑戦者の構図」がほぼ確立されたウルトラらしい大会。そして「効果音革命」が起きた日本クイズ番組史に残る重要な大会。ボタン押し、正解、不正解時の効果音が電子音となり、改良を重ねながら今でも様々なクイズシーンで使用されている。もはや文化伝承レベルである。

ウルトラクイズ殺人事件や双子神経衰弱、ケンタッキーダービーなど、クイズに工夫を感じる第6回。第5回に比べるとキャラの印象は薄いが見る者はタイ系美人・今井さんを応援か。クイズの実力は高木さんが一番の様に見えたが、決勝はトドさんが制す。優勝賞品とスタジオ結婚式イイね。

多くのアクシデントに見舞われルートも短い第6回。全体的に工夫は見られるものの若干空回り感も。優勝賞品の世界一周ももっと活かされたはず。ニューオリンズはトメさんが映っていないだけでなく、初の人物当て形式もありカメラが全体的に不安定。スタッフの動揺が伺える。

回答権獲得ボタンと正解不正解の音が電子音に変わり2020年現在でも多くの別番組で頻繁に使われている。ウルトラクイズを象徴するSEとなった。優勝賞品の世界一周は一見まともだが日中フライト、到着後観光もそこそこに泊、起きたらまたフライトという激務を「テーマは夕陽を見る事」という言葉で料理しているのがうまい。